

特集 ● 信濃川今昔物語

川と共生してきた長岡の人々

樋口 勲

1. 信濃川の被害と長岡

長岡市西蔵王に鎮座する金峯神社の西隣にあった蔵王堂城。水路が主要交通網だった時代に、信濃川舟運の拠点であり、また、古志、三島、蒲原を束ねる中心的な場所でもありました。経済的に軍事目的にも要衝であった一方で信濃川の水衝でもあり、被害を蒙った堀直寄は廃城を決断。信濃川の被害によつて、長岡の拠点は蔵王堂城から長岡城へと引き継がれました。

堀氏が着手した長岡城築城を完成に導いた牧野氏は、柿川等の流水を堀に巡らせ、栖吉川や赤川を自然の外郭として、要衝を築いていきました。当時の外濠に架けられた追廻橋や鎮火祈願のために、柿川の脇に建てた蟬座稲荷など、長岡城と川の深縁は今でも辿ることができます。

しかし、長岡城もまた信濃川の被害から逃れることはできませんでした。『信濃川の氾濫』によれば「1620（元和6）年3月13日信濃川大洪水。三島・古志郡界を一変せしめた」とあります。

1645（正保2）年の国絵図では、信濃川の流路は現在の妙見から大きく西へ向かい、篠花



【金峯神社・流鐘馬】



【長生橋流失の図（長岡市下田氏所蔵）】

や飯島を回り込むように東へと流れを変え、左近や草生津に向かつて流れていました。そして、その流れの先にあつたのが長岡城です。

「お前だか、左近の土手で、背中ばんにして豆の草取りやる。」

長岡甚句の一節に登場する左近の大手手は、長岡の要衝を守る一大プロジェクトとして、長岡藩により1740年頃から繰り返し為されてきました。

1748（寛延元年）に2万人を超す労力を投入し、半年足らずで土手を築き、その後も補強を繰り返し、1781（天明元年）に大規模な工事を行い、左近から現在の信濃まで続く大手手を整備、長岡は信濃川の被害から解放されたはずでした。

1868（慶応4）年、長岡に大きなダメージを与えたのは戊辰戦争だけではありませんでした。黒津で約1kmに渡つて、信濃川堤防が決壊するなどし、長岡は泥海となり、人々は「兵水の両難」と称して被害を蒙りました。



【長生橋・長岡の街】



【竹寛】

さらに1896（明治29）年、長岡から燕、三条、新潟、新発田までが浸水する、越後平野史上最大最悪の大洪水「横田切れ」が発生しました。当時の長岡の被害が記された『長岡附近大水害実況』によれば、7月18日に長生橋付近から洪水が越流し、同日に長生橋流失、21日には太子宮裏（現在の信濃川河川事務所付近など数箇所）で堤防が決壊し、本町、殿町、千手、柳原、神田などで1m程の浸水、中島では石油土蔵が倒壊し、貯油流出、信濃川堤頭から見た様相は「万里広漠の大洋であつたとあります」。

この水害の翌年に、時の権力者である山縣有朋、松方正義に宛て、越後平野の水害解消策を提唱した人物が、中之島杉森出身の高橋竹之介です。「北越治水策」と銘打たれた新聞片面程の大きさの装丁本には、5枚の地図が収録されており、最後の図面の中心に描かれているのが大河津分水でした。

その高橋竹之介が殿町に開塾した「誠意塾」から巣立った人物に、国会議員となり大河津分水を実現に導いた大竹貫一がいました。

4

5

●洪水にも対応しながらの工事は大変ですが、一般に河川工事は、河川の一部を締切り、内部をドライな状態にして構造物を築造します。しかし、大河津分水路は川幅が狭く、締切ると水位が上がり、堤防が危険となるため、できません。よつて、施工の大部分は船舶や潜水士作業で行います。しかし、現場が河口に近く、気象（風・雷）や河川流量や海象・外洋波浪の影響も受けるため、独自の河川水位予測システムを用いた安全管理等、細心の注意を図りながら行っています。

さらに、梅雨や台風による洪水や融雪による出水、波浪等により工事が遅延しがちです。しかし、事業が遅れば、近隣住民の命や財産を危険に晒す期間が延びてしまいます。

我々建設業に携わる者は、「エッセンシャル・ワーカー」としての使命を全うするために、年末年始もGWもお盆期間も、作業を止めることなく、昼夜兼行で施工をしています。休みが取れない等のマイナスの印象を持たれがちですが、これからの100年のためにモチベーションとし、歴史的大事業である「令和の大改修の担い手のワンピース」として、「安全が第一」のスローガンのもと、愚直に現場と向き合っています。



2019.10.12-13/ 大型台風19号の影響で分水路の鉄道橋まで水位が上がった。第二床固付近も、洪水が巻き上げる霧で、周囲は泥臭かった。工事現場は洪水がくれば、工事を止め、資材を川から運び出さなければならない。まさに、お天道様と相談しながらの、命がけの工事である。



我らはワンチーム。
これからの100年のために、
令和の大改修に臨む！

鹿島・五洋・福田特定建設工事共同企業体 大河津分水路新第二床固改築 JV 工事事務所

令和の大改修・大河津分水路改修事業

人々の命と暮らしを守るため、これからの100年のために、
最前線で闘う人たちがいる

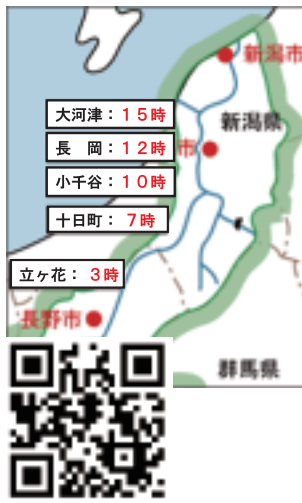
●11月号に「登場頂いた信濃川河川事務所の室永武司所長から、洪水対策の切り札として『令和の大改修』と称される大河津分水路改修事業の工事現場をご案内いただいた。

我々の命と暮らしを守るために、危険と闘いながら、最前線で活躍する人々を「エッセンシャル・ワーカー」と呼ぶ。そのおひとり、現場責任者の萩野 剛所長（鹿島建設）にお話を伺った。

（室永）昨年10月13日、台風19号の影響で、米ワスガが中止になり、台風一過の晴天の中、信濃川の水位は、どんどん上昇していました。信濃川の上流にある千曲川の堤防を決壊させた、とんでもない洪水は長岡を襲いました。長野の大雨は約9時間かけて長岡に到達し、その速度は約12km/h。皆さんの感覚より、洪水は、ゆつくり到達します。（図1・到達時間）

この時間を「地の利」とし、避難はもろろ、家財や車の移動にも活用して頂くため、信濃川の洪水の特徴をまとめた動画を公開しました。ぜひ、ご覧ください。（晴天の大洪水QRコード）

●萩野さん、どんな工事をされているのですか？
（萩野）大河津分水路は、およそ100年前に作られた水路ですが、入り口が70mあるのに対し、出口が180mと狭く、洪水が流れにくい構造になっています。台風19号の際も、堤防が危険に晒されました。我々は川幅を100m広げる工事のうち、「第二床固」の工事を担当しています。



室永武司所長（信濃川河川事務所）と萩野 剛所長（鹿島建設）は、「百年先まで越後平野を守る大河津分水路改修事業は地域の長年の悲願。一刻も早く完成させたい、安全に終わらせたい。」と熱く語った。



【長生橋】

長岡造形大学初代学長の豊田協先生は「信濃川流域に出土する火燭土器は信濃川の暴れる様を表現したのではないか。」と語られています。博物館で火燭土器を眺めていると、不思議と納得させられるものがあります。

そして、長岡が大きく困窮した戊辰に運ばれた米百俵もまた信濃川の水路で運ばれました。

特に、長岡藩は新潟港から長岡・小千谷までの舟運の実権を掌握。信濃川は長岡を基点に、上下流で川の様相が大きく異なり、大型船と早川船に、相互に積み替える必要があつた地形的な要因も大きく、これに目を付けた長岡藩は柿川一帯を川港化しました。

舟通しに由来する西蔵王にある開門橋、柿川沿いの石油土蔵が由来の宝田橋、柿川と信濃川を結ぶ新川跡地にある三角形の公園、木材の荷揚げ地であつた大町など、長岡の人々と川との繋がりは今に遺されています。

同時に、私たちの身体には、災害を乗り越えてきたDNAが何百年、何千年と刻まれています。平成16年の水禍や震災、平成23年の豪雨災害などを乗り越えて、ここに住まう私たちのDNAには、益々、その強い意志が宿っているのだと感じます。

このDNAを、次代に受け継ぐために、私たちにできることは何か。

先人達が身を粉にして遺してくれた数々の遺産のうち、大河津分水は2022年に、通水からちょうど100年を迎えます。

100年から始まるネクストステージ。私たちにできること、私たちがすべきことは、まだまだ、たくさんありそうです。



●筆者 樋口 勲 Isao Higuchi
Love River Net 代表



■協力：国土交通省 北陸地方整備局 信濃川河川事務所
鹿島・五洋・福田特定建設工事共同企業体 大河津分水路新第二床固改築 JV 工事事務所
■企画編集：渡辺千雅